

〔伊呂波字類抄加體〕肘カヒナ 脊亦作脣 已上同

〔日本書紀二神代〕一書曰、略中使太玉命以弱肩被太手繩而代御手以祭此神者始起於此矣。

〔倭訓榮興前編三十六〕よわかひな 神代紀に弱肩をよめり、弱は太手繩にむかへたる謙辭也。今云ふ二の腕也。一説に、左の肩也といへり、よつかたとよむべし。續紀に、弱き身に重さ任する事を詔したまへり。

〔空穂物語あて宮〕うちにめしいるとて、宮女君たちしそきたまへるものおぼえぬ、きみの御手にこの御文をおしいれて、をよびのさきして、かいなにかきつく。

〔陰徳太平記十一〕南條吉田合戦之事。

瓦ニ鎗長刀ノ切先ヲ汰火華ヲ散シテ攻戦、南條豊後守ハ、左ノ手ノ無リカレバ、ニソ腕ニ三間柄ノ鎗ヲ繩ニテ結付、右ノ手ニテ石衝ヲ執テ衝ケルニ、元來聞ユル大力ナレバ、兩手ニテ突ヨリモ猶輕ゲ也。吉田左京亮眞先ニ進テ南條ト渡シ合、略下。

〔新撰字鏡肉筋節也、比知張柳反上、辭

〔倭名類聚抄三手足〕臂

廣雅云臂音秘謂之肱古弘

四聲字苑云肘

陟柳反或和名比知

臂節也。

〔箋注倭名類聚抄二手足〕曲直瀬本秘作比、按臂在去臂五寘、秘在六至、比在上聲五旨、又平聲六脂、去

聲六至、其音並不不同、○中所引釋親文原書作肱謂之臂、玄應音義再引與此同、按說文臂手上也、又

云、玄臂上也、云、或从肉、又云、肘臂節也、則知上謂之肱、下謂之臂、其間節謂之肘也、肘訓比知可從、臂

宜訓、多々牟岐、古事記仁德紀御歌、辭漏多娜武枳、謂臂之絜白、則多々牟岐、非腕可知也、神代紀、雄

略紀、天武紀臂、齊明紀手臂皆訓多々牟幾、俗呼宇天、肱宜訓加比奈、今俗所謂二乃宇天是也、新撰

字鏡臂訓太々牟岐、肱訓加比奈、並爲得、廣雅云、肱謂之臂者、混言之耳、又按靈異記訓釋云、臂可比

那後撰集戀部三平定文歌小序、榮花物語、狹衣物語、亦謂臂爲加比奈、蓋中古混同無別、今俗有加。